

---

# 英雄

南高陽介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

英雄

### 【Nコード】

N6670Y

### 【作者名】

南高陽介

### 【あらすじ】

科学の進歩、それは新たな脅威を生み出す。

アフリカにおける米中の代理戦争にBSC（Bio Science Creature）と呼ばれる生命兵器が導入される。戦果を挙げるものの、非人道性と生命倫理を無視した行為のために国連で禁止された。これに反発した科学者がBSCを逃がし、世界各地に出現するようになる。

被害を食い止めるため国連は世界防災連合（WDU）を組織し、その実働部隊として防災特殊部隊（DTF）を各地に創設した。

これは、人類の平和を守る彼らの物語

## プロローグ（前書き）

初投稿です。拙筆で申し訳なくなります。  
書き表し方、基本、ルール等早めに覚えるのでご容赦下さい……。

## ブローグ

2055年 アフリカ 某所

アフリカの雄大なる大地に日が沈もうというとき、一人の若者が煙草に火をつけ写真を眺めていた。

「あと4日で帰れる」

故郷の地へ思いを馳せながら、煙を吐くように呟いた。そのとき、けたたましい警報が鳴り響き、スピーカーが叫んだ。

「総員第1種戦闘配置」

若者は、すぐさま銃を担いで走り出した。

銃声が鳴り響き、人の怒号と悲鳴が飛び交う。

「全然効いてないぞ、この化け物！」

「駐营地は放棄、直ちに撤退する。集結点はB-3だ走れ！」

隊長の指示が飛んだ。

若者は全力で走りだした。

（こんなところで、死ぬわけにはいかない）

その瞬間、強い衝撃を受け宙を舞い、地面に叩きつけられていた。  
「もう駄目か」

薄れゆく意識の中で、巨大な黒い影が迫ってくるのが分かった。

「ごめん……」

意識は深い闇の中へと消えていった。

## 1・新たな脅威（前書き）

人が人であるうちは必ず過ちを繰り返す……

## 1・新たなる脅威

2060年 夏 災害特殊部隊（DTF）日本支部作戦室

「本部の偵察船が太平洋上で大型の漁影を確認、第1種監視対象として警戒せよとのことです」

オペレーター白木のよどみのはっきりとした声が作戦室に響く。

「奴さん久しぶりに現れたな。腕がなるぜ」

「あんた本当デリカシーないわね、馬鹿じゃないの。」

「馬鹿……って、おい！」

「南野、北見、二人ともその辺にしとけ。」

副隊長の西村がたしなめる。

「すみません！」

「はい……すみません。」

一応の謝罪の後、すぐに小声で喧嘩を始める。そんな様子を見て苦笑しながら西村が尋ねる。

「隊長、どうしますか？」

隊長と呼ばれた男は、腕を組んだまま微動だにしない。やがて、まくし立てるように口を開いた。

「監視対象の捕捉を早急に行う。初代と仲里が戻り次第調査に向かう。白木、太平洋沿岸の自治体に遊泳禁止措置の通達を頼む。」

それだけ言つと銅像のように沈黙する。

（テンパってるな……）  
西村は微笑んでいた。

\*

千葉県九十九里海水浴場

地球温暖化が進み、最高気温が関東でも40度を近くになることは  
さらである。

そのおかげで各地の海水浴場は盛況となっている。

「現在、太平洋沿岸一帯に怪獣注意報が発令されました。海から上  
がって下さい。」

市の広報車からやる気のなさそうな声がスピーカーから聞こえる。

「まったく、注意報だして何もなかったら文句言われるの俺達なん  
すよ」

「まあまあ、何かあつてからじゃ責任取れないしな」

「普通誰も従わないですよ」  
ほとんどの場合、注意報が出てても何も起きない。このようなことが、  
人間の警戒心を緩めていくのだ。

「何だあれ？」

一人の海水浴客が異変に気がついた。海の一部が異様に盛り上がっているのだ。

そしてそれは、こちらへと近づいて来ている。

衝撃は車に乗っていても分かる程大きなものであった。

慌てて車から降りた市の職員が見た光景はこの世のものとは思えないものだった。隊長40mはあろうかという鰐が人を襲い、逃げ惑う人々であたりは騒然としている。

「何だよ……これ」

二人は呆然と立ち尽くすしかなかった。

やがてあたりは何事もなかったかのように静まり返り、聞こえるのは波の音だけであった。

## 1 - 2 新たなる脅威

### D T F 作戦室

「千葉県九十九里海水浴場でB S Cが出現したとの通報がありました」

作戦室の空気が真夏であるのにもかかわらず凍りついた

「被害状況は？」

東山の鋭い声が飛ぶ。白木は困ったような顔をしながら答えた。

「不確定情報ではありますが、死亡者は30名を越えているのではないかということです」

「おい！嘘だろ！過去そこまでの被害が出たことなんてないぞ」

「落ち着け！まだ確定情報じゃない」

西村も南野を宥めたものの焦りは隠しきれていない。これと対象的に、北見は驚くほど冷静だった。

「初代と仲里を待つ猶予はありませんね」

「そうだな。西村、南野、北見は直ちに現地へ向かってくれ。それと、重火器の使用を許可する」

東山の決断は驚くべきものである。

重火器の使用は緊急時と通常装備で対応ができないときの特別措置で、支部長の許可が必要となっているからだ。

「了解！」

3人は作戦室を飛び出した。

\*

千葉県九十九里海水浴場

血で赤く染まった砂浜、押し潰された人間の遺体、転がる肉片、現場はまさしく地獄絵図であった。

駆け付けた警察官達もあまりの惨状に何もできないでいた。

そこへ一台の車が走り込む。黄色の車体に黒のライン、赤字でDTFが書かれた特殊戦闘車両である。

濃紺の戦闘服を着た3人が車から降りてきた。通常、調査の場合スーツ型の制服を着用する。重火器の許可といい事態の深刻さが窺える。

「ご苦労様です。千葉県警の豊橋です」

「DTFの西村です。早速ですが状況は？」

「詳しい状況は不明です。今、お話を伺っているところです」

「使えないわね」

北見が聞こえる程度に呟く。

「言いたいことがあるならばつきりお願いしたいもんです」

「じゃあ言うわ。事件発生から30分も……」

言い終わらないうちに南野が遮って、後ろに引つ張っていく。

「突っ掛かるのはやめろ。どうみても所轄の警察官が対処できる状況じゃないだろ」

「警察出身だからって肩持つのはやめなさいよ」

「それは関係ない。お前冷静に見えてそうでもないんだな」

しばらく言い合いをしていると

「そろそろいいよね？」

顔は笑っているが、西村は有無を言わせない口調である。2人は反論する余地すらなかった。

「南野君は現場にいた人に話を聴いてきてくれ、北見さんは僕と調査。以上」

「了解」

2人は同時に返事をした。

\*

被害者達は海の近くにあるホテルに集められていた。南野は一人一人話を聴いていった。

（情報は大きな鰐つてことくらいか）

現場に戻ろうとしたとき、若い女性が声をかけてきた

「あの……これ」

そついいながら多機能端末を差し出している。

「録ったの？」

女性は小さく頷いた。

「ありがとう！ちょっと借りるね」

務めて明るく振る舞った。端末を受け取り、ホテルをあとにした。

「こちら、南野。本部応答願います。」

『こちら、本部の白木です。どうぞ』

「映像を手に入れたので、そちらで解析お願いします」

『わかりました。転送してください』

＊

現場に残った2人は調査を始める。

「酷いですね。早めに遺体を収容してもらった方が……」

「そうだね。BSCがいらない以上僕たちにできることは限られるからね」

「私……BSCだけでも許せないんです」

「それは隊員として？それとも個人の意見？」

北見はまるで聞こえていないかのような顔をしている。

「答えたくないなら構わないよ。ただ、復讐という気持ちに縛られるのはあまり感心できないよ」

「私の気持ちなんてわからないわ」

今度は絶対に聞こえない声で呟いていた。

＊

## DTF作戦室

「全員集まったな。白木始めてくれ。」

「はい。南野さんが送ってくれた映像を解析しました。これを見て下さい」

大型のスクリーンに人が逃げ惑う映像が映される。

「逃げ惑う人だけかと思われませんがここを見て下さい」

白木がポインターで示した場所に全員が注目する。そして、白木がキーボードで何か操作をするとその部分が鮮明となった。

「尻尾だ！」

初代が指摘する。

「そうです。海に潜るところを映したようです。これをアーカイブと照合したところ該当BSCがいました」

クリックすると、画面が鰐のようなBSCの画像に切り替わる。

『識別コードUSA・F09』

BSCにおけるコードには意味があり、創造国、種別、創造番号を表している。今回の場合だとアメリカ力魚型の9番目ということになる。

「非常に凶暴で肉食、魚型ですから水中を高速で泳ぐことも可能です。あと、皮膚が非常に硬いという特徴もあります」

白木の説明に、みんなため息をつくしかなかった。

「それにしても、今までどうして被害が出なかったんでしょうか？」

仲里の疑問は的を得ていた。今回のBSCは今までに目撃情報すらないのである。

「確かに気になるところではあるけど、対策を先に練ろう。弱点は記載されてる？」

西村の客観的な意見が入る。DTFはBSCの殲滅が最優先となっているからだ。

「はい。魚の特徴を加えたことでエラ呼吸となっているようで、陸上での活動は10分が限界のようです。」

「弱点と言えるか、それ」

南野は机の上に突っ伏してしまった。長い沈黙の時間が流れる。

「魚だから釣っちゃいますか」

初代の冗談で場が少し和んだ。

「釣れるわけないだろ」

「初代も馬鹿だったのね……」

「初代君まじめに考えてよ」

「それ使えるな」

「ですよね……ってええ！」

東山の思いもよらない一言に西村以外全員が度肝を抜かれた。

「よし、釣り1号作戦に決定だ」

そう言々と作戦室を出て行ってしまった。啞然とした顔で見  
る隊員達に

「お前ら早く慣れるんだな」

それだけ言っと、西村も席を立った。

## 1 - 3 新たな脅威

「作戦は以上だ」

「本当に……やるんですか？」

南野は再度確認する。それほど奇抜な作戦であったのだ。

「なんだ？ 異議か」

「異議というか、肉積んだ船を餌にして食いついたら大型の巻き取り機で引き揚げるなんて……正気とは思えないんですけど」

「俺は正気だ。それに引き揚げたらクレーンに吊した鉄球を上からくわす、火器が通用しなくても問題ない」

南野は瞬時に諦めた。こうなると東山の意見を変えることが容易でないことを知っているからである。

「技術局の全面的な支援も得られる。多分……大丈夫だ」

西村が何とか場を取り持とうとする。そんな光景を見て

（副隊長は苦勞してるんだな）

初代と仲里はそう思わずにはいらなかった。

「引き揚げた後のフォーメーションは3 - 2 - 1で展開。奴が後退

しないように南野、北見、西村で攻撃。尻尾には気をつける。」

「了解」

「初代と仲里は横に行かないように左右から誘導攻撃。まあ安全だろ」

「了解しました」

「前方は俺が責任もって務める、以上だ。解散して休んでくれ」

「肝心な要地の確保はできてるの？」

2人だけになった作戦室で西村が尋ねる。

「心配するな。今から都知事に掛け合う」

「あの知事、頭だいぶ固そうだけど」

「拒否してきたら切り札をつかう大丈夫だ」

「お前がそう言うなら大丈夫だろ」そう言って西村は作戦室を後にした。

\*

## 東京望の島

夢の島に倣って名付けられたこの埋め立て地は、5年前より開発が停止している。莫大な税金が使われたこともあり批判の矢面に立たされている。

「都知事が開発停止中とはいえよく承諾してくれましたね」

初代は素直に感心している。

「幸せね。何でも信じられて」

北見が皮肉を言う

「え、何か裏があるんですか？」

ひととき大きな咳ばらいが会話を遮る。

「作戦は0900から始める。各自装備の点検だ」

「了解」

装備は携帯型対BSC砲が主装備として使われる。着弾時の衝撃と爆風で大型のBSCの侵攻を食い止めるために使われる。

＊

「隊長、今日は諦めませんか」

南野がお願いしますよという口調で言う。

「釣りの醍醐味は待つことにある」

「もう5時ですよ。8時間待って気配すらないんですよ」

「まあ、そういわないで。日の入りまで粘ろう」

西村が間を取り持つ。しかし、隊員達は緊張からの疲労からか、今日はもう来ないだろうと油断していた。その時だった。

『当たり前です！餌に食いつきました』

白木から通信が入る。

「総員、持ち場につけ！！」

腹の底からの怒声に隊員達は目が覚めた。待機室を飛び出し戦闘態勢に入る。

改造された巻き取り機が嫌な音を立てて軋み、物凄い勢いで釣り糸である特殊合金線が引き出されていく。

「残り何mだ？」

『1000mです』

「よし、残り200mでリバースしてくれ」

『カウント始めます。5、4、3、2、1、リバース開始』

激しい動力音とともに釣り糸が巻き取られていく。BSCは左右に泳いで抵抗している。

『残り50mで引き揚げられます』

やがてその巨体が見えてくる。黒々とした身体、大きな口、鋭い牙。画像で見た印象とは全く違う。まさしく化け物である。

計画によると、海から100mの地点が鉄球落下地点になっている。しかし、80m引きずったときだった、激しい抵抗により鉄線が断裂した。

「まずい！作戦変更だ。」

総員、後方から奴を追い立てろ」

瞬時に状況判断して作戦を立てる。

「了解」

すかさず4人は走り出し、後方へ展開する。そして、BSC砲の引き金を引く。

ドン！

ドン！

激しい炸裂音が響く。BSCはじりじりと前へ進んでいく。

「よし！落……」

その刹那、BSCは前に突っ込んだ。隊員達には隊長がそれに巻き込まれたように見えた。

「東山隊長！」

BSCは鉄球を吊していた大型クレーンに激突した。バランスを崩したクレーンは前のめりにゆっくりと倒れていった。

衝撃と土煙、隊員達は呆然と眺めていた。そして、土煙の中から何かがこちらに近づいてくる。

「構え！」

西村の号令で砲を構える。

「作戦は……概ね成功だ」  
「隊長！」

土煙から出てきたのは東山であった。全員が駆け寄る。

「死んだかと思いましたよ」

「これくらいでは死ねん」

「奴はどうなりました？」

「北見は相変わらず冷たいな……死んだよ、多分」

やがて土煙がおさまり、辺りの様子がわかるようになった。

そこには、クレーンのアームの下敷きとなり絶命したBSCがいた。

「作戦は思いつきでやるもんじゃないな」

東山はしみじみと呟いた。

「当たり前だろ」

とは誰も突っ込めないのであった。

### 1 - 3 新たなる脅威（後書き）

読んでくれている、数少ない人に感謝しています。感想、レビュー等は気軽にどうぞ。

次回はもう少しうまく書けると思います。

では、またよろしく願いします！

## 2・人と鬼の狭間で（前書き）

未来は自らの手で切り開くものだ……

## 2・人と鬼の狭間で

夏の陽射しは、容赦なくアスファルトを照り付ける。地球温暖化の影響で、日常的に最高気温が40度となる。外は地獄のような暑さである。

時刻は15時を過ぎ、下校する児童や学生の姿が目につく。日常の光景である。そんな光景に合わない、一台の車が走っている。

「こちら初代。異常ありません」

本部へ定時連絡をいれる。

『お疲れ様、本部了解です』

オペレーターの白木のはつきりとした声が無線から聞こえる。DTFは、目撃情報などをもとに地域を決め警戒任務につく。

警察庁は快く思っていないようだが、DTFでは重要な任務として位置付けられている。格好が警察官と似ていることからよく市民に間違えられている。

「それにしても暑いな」

「仕方ないですよ。人間が自分でこうしたんですから」

初代の同期の仲里が運転しながら答える。

何事もなくパトロールを終えようとしたとき、初代がふと窓の外

公園を見ると。小学生1人が3人に囲まれている。

「ごめん、ちょっと止めて」

仲里が車を止めるや否や、初代は車を降りて、その集団に向かって話しかける。

「ちょっといいかな？」

3人は走り去ってしまった。

「さっきの友達？」

「別に……」

「困ってるなら、俺が話を聞くよ。俺はDTFの初代真。よろしく」

「……平良。平良悠紀」

少年は小さな声で答えた。服は泥にまみれ、所々血が出ている。優しく声をかけられたせいか、急に泣きそうな顔になる。

「おいおい。男が泣いていいのは妹の結婚式だけだぜ」

「何変なこと言ってるのよ」

いつの間にか来た、仲里に頭を叩かれる。それ見て、悠紀の顔に少し笑顔がもどる。

それから、公園のベンチで2人は悠紀の話を聞いた。

「友達は自分で作るんだ。諦めるな。それに俺達はまだ友達だ」

「本当に？じゃあ僕の2番目と3番目の友達だ。」

悠紀は無邪気に喜んでいる。

太陽は西に傾き、橙色に輝いている。都会では珍しく蝸が”カナカナ”と泣いている。

「あ、もうこんな時間だ。帰らなきゃ」

悠紀は駆け出す。公園の出口で振り向き「またね」と言い、走り去っていった。

「俺達も行こうか」

2人が車に戻ると、いきなり東山の怒鳴り声が無線から響く。

「どこ、ほつつき歩いてんだ」

とうに帰隊時間は過ぎ去っており、隊長はお冠であった。

初代は「すみません」とだけ言い無線を切った。

「無線切ったのはあなたよ。私知らないわよ」

車が夕日に向かって走り出す。

「今日も平和だね」

初代は額の冷や汗を腕でこすった。

「2人何してたんだって？」

西村がにやにやしなから聞く、

「子供と戯れてたらしい」

「彼らしい。仏のような優しさを持つてるからね」

「いつかは鬼になるときが来るさ」

東山は寂しそうに言った。

\*

男が1人夜道を歩いている。

空が曇っているせい、星も月も見えない。道を照らすのは街灯の無機質な明かりだけである。

そんな不気味さからか、自然と足早になる。

いつもの道のいつもの角を曲がった時だった、奥にいつもとは違うそれがいた。

瞬間、激しい痛みが男を襲った。辺りに血の海が広がる。傷を押さえようとしたとき、右腕がなくなっていることに気がついた。

「なんだよ……これ」

男は倒れて動かなくなる。

辺りには狼の遠吠えが響き渡っていた。

警報が鳴り響くと同時に初代は飛び起き、装備一式をつけ作戦室に駆け込む。

「どうしたんですか？」

「今から説明する。座れ」

東山が不機嫌そうに言う。

夜の防衛体制は、2人ずつ3交代である。残りの1人が完全休養となる。交代してすぐ戻されたのだろう。

「警察からの応援要請です。警戒地点A-9でBSCによるものと思われる惨殺事件が発生したとのことです」

「A-9で、昼にパトロールしてたところ……」

仲里は絶句している。

「君達のせいじゃない」

西村がフォローを入れるが、仲里は俯いている。

「落ち込んでる暇はないぞ。すぐに現地に行く。装備は市街地戦用、出発は0130だ。以上」

「了解」

初代と仲里は重い足取りで作戦室をあとにした。

## 1 - 2 ・人と鬼の狭間で

「市街地だからな。銃器の使用には細心の注意を払え。ただ…」

「それに臆病になるな。ですよな？」

北見が言った。仲里はそのとき北見から殺気のようなものを感じていた。

「よし、わかってるな。目標は発見次第殲滅だ。以上」

西村と初代、北見と仲里、東山と南野でバディを組み、3方面から索敵を開始する。

装備はWDUが独自に開発したDA-2機関けん銃、愛称”マル二”である。人識別システムが搭載されており、人に向けるとトリガーが引けなくなるという安全性を誇る。しかし、対BSCでは1分間に1500発という性能を発揮する。

「副隊長、マル二で大丈夫ですかね」

前を歩く西村に聞く。

「どういう意味？」

「いえ……もし前みたいなどんでもない奴だったら、効きませんよね」

「そのときは殉職するしかないな」

西村は笑いながら答えた。

開始から2時間が経過しているが発見の報告は入らない。嘘のように静寂な夜、唯一聞こえるのは自分達の足音だけである。そんな静寂を乾いた連射音が切りさく。

『こちら仲里、目標を発見。援護願います』

無線が入る。

初代はすぐにGPSを確認する。

「東に400mです」

「急ごう」

西村と初代は走り出す。

\*

敵は素早く動きまわり北見達を翻弄する。

「何やってんのよ！打ち続けなさい」

「でも……」

仲里は民家を気にしてトリガーを引くのをためらっているのだ。

「あなた、死にたいの！」

その時、鋭い爪が北見を襲った。

初代と西村が駆け付けると、倒れた北見と叫びながら弾切れになったマル二のトリガーを引き続ける仲里がいた。

「北見さんを頼む」

西村は仲里に近づいていく。

「もういい」

そう声をかけても、トリガーを引き続ける。西村はマル二を押さえ付け、しっかり目を見て話かける。

「やめるんだ」

仲里は崩れ落ちるように座りこみ、子供のように泣きだした。

「副隊長、出血が止まりません」

北見は「奴を追って」と呻くように声を出している。

「東山、北見が負傷した」

無線で状況を報告する。

『……任務は中止だ。北見を収容して病院に送る。待ってる』

3分後、南野が運転するDTFの車両が到着した。

「早く乗せて下さい！」

初代と西村は後部座席に北見を横にして入れる。

「副隊長は助手席にお願いします」

「初代君、仲里さんのことは頼んだよ」

西村がそう言い、車に乗るや否や。サイレンを鳴らしながら車が走り出す。

初代の目にはランプの赤い光がしっかりと焼き付いた。

\*

「私のせいだ」

本部から迎えにきた白木が運転する車の中で、仲里は泣いている。

「北見先輩なら大丈夫だよ」

しかし、仲里は泣き続けている。初代はそれ以外にかけ言葉が思いつかなかった。

「お前の涙で何か変わるのか……泣いてる暇があったら強くなれ」

東山が突然怒鳴った。初代はその迫力に驚かされた。そして、仲里も泣き止んだ。

車が本部の駐車場に着くと白木が口を開いた。

「仲里さん、行きましようか」

仲里は白木に連れられて行った。初代は東山の後ろを歩いてついていく。

「隊長、あんな言い方しなくても……」

「あいつのためだ。お前も強くなれよ」

初代は反論しようと思ったが思い止まった。東山の背中がなぜか寂しそうに見えたのだ。

北見の状況が分からないまま、日が登り朝となった。東山の携帯がなったのは午前9時のことだった。慌てて東山が電話に出る。

「どうだ？北見は無事か」

『命に別状はありません。しばらくの入院が必要みたいです』

南野の報告に安堵が広がる。

（本当に良かった）

仲里は心の底からそう思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6670y/>

---

英雄

2011年11月24日16時56分発行